

江戸時代の支配者たち

江戸時代初めは幕府領で代官たちの支配が続きました。一六九七年からは旗本松前家が五代にわたり百五五年間支配者となりました。蝦夷地支配の松前家の分家で、初代の当広は將軍綱吉の側に仕え一千石を与えられ、岡本、山崎、寺分、小袋谷の四カ村が知行地となりました。松前家は年貢を段々増やして近隣の旗本領に比べても約二倍の量を厳しく取立て、村人にとつては度重なる凶作とあいまって苛酷な負担となり困窮を極め細々とした暮らしが幕末まで続きました。

幕末になると大名預り地となり、まず近江彦根の井伊家が一八五三年まで預りました。一八五三年は黒船が浦賀沖に現れた年です。その後、当主の直弼は大老になり開国を断行しましたが、一八六〇年に桜田門外で暗殺されました。

次は肥後の細川家の預り地となりました。細川元首相の七代前と六代前の当主が相模と武蔵の沿岸警備を任された為です。その後、開国となり横浜港を開港しましたが、不穏な情勢が続きました。

一八六三年からは同じ任務で下総佐倉の堀田家の預り所となりましたが、四年後の徳川慶喜が大政奉還をした一八六七年には一時幕府領に戻り伊豆韮山の江川太郎左衛門が代官になりました。そして翌年、明治時代が始まりました。